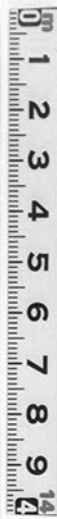


詩南車



詩

雲 雲
夜冬の雨(他一篇)
冬
廣小路
六人の女
十字架を負ふ
三條河原の夢
野にただつて
……他六名……

睦月集

詩南東詠草

俳句

八島蘭外
本田朝忠
……他十一名……

創作

寄附金
早稲
編輯後記

館高深川
旦野川
河田
高木
中山
永井
中島
片島
片寄
歌二

重邦
重邦
正外
風外
志子
夢邦
頭とみ
歌二

文志樓
寄文志樓
何

林總一郎
澤本富之助
片寄歌二

主 催 詩 南 社
後 援 磐 城 文 藝 協 會

磐城新聞社
常磐毎日新聞社
磐城時報社
十好會

題字 巖谷小波
表紙 酒井先生

田家の朝 (俳句)

只野 各一夢
親 野 月
榮 原 陽 院
宮 田 青 波

和歌

高 久 曉 西
茂 川 満 莊
萩 原 太 計
澤 本 富 之 助
榮 田 羊 臺
清水 原 星 子
宮 水 持 子
山 成 吉

巖谷小波

感想

日笛を吹きつゝ
二二二に現はれし混濁氏と
その周囲
佐平次國物語

赤羽松堂
酒井耕影
佐藤とら
只野 正 勇 清
山 正 勇 清
佐藤とら
島 本 三 菜 之
坂 本 三 菜 之
波 邊 龍 太 郎
清野 榮 二
佐藤 義 家

片寄 賦 二
松本 純 一
夢野 夢 之 介

雪 空
夜半の雨他一篇
冬
廣小路
六人の女
十字架を負ふ
三枝河原の夢
野にたづみく
松六名

睦月集
詩南車詠草
俳句
八島 蘭 芳
本 田 朝 忠
鶴十一名

創作
早 寄 附 金
福 朝 後 記
熟 金

前 高 重
川 野 重
其 出 正
河 本 風 外
高 木 風 外
中 井 世 子
水 井 夢 郎
島 岡 と み
片 寄 賦 二

林 純 一 郎
澤 本 富 之 助
片 寄 賦 二

五 寄 文 志 理
何

生を得てより茲に四歳、本誌の行く可き方向は表示されて來た。我々は飽くことなき相互的信念の下に進歩して行かれる事を深く喜ばいと思ふ。

詩南車二拾輯を記念とし極めて意義ある全國詩歌俳人の短冊色紙展覽會を開催して尊き記念の一録とし潤澤ある歡を盡したひと思ふ。幸ひ諸賢氏の贊助を得てより良き好果を結び得たならば望外とする所である。

出品の一部

本居宣長、蜀山人、芭蕉、泰山村暮鳥、西郷南洲、加藤高明、河野廣中氏等の遺墨。

短冊、色紙約二百余點、全國同人雜誌百五十餘種

出品規定

一、詩
一、和歌、俳句

原稿用紙又模樣付レターペーパー特に歡迎三枚以上の事
短冊又は色紙一枚以上の事
其他、繪畫、書、參考品等の出品を希望致します。

出品 緋切
送附 先

福島縣平町五丁目詩南社宛

開催日
會場

福島縣平町 藤田女學校（三階）
當日は卒業記念バザー展覧會が開かれます

主 催 詩 南 社
後 援 磐 城 文 藝 協 會

磐城新聞社
常磐毎日新聞社
磐城時報社
十好會

朝の家田

俳諧三つ物

瀬谷 一夢

標繩や初日に藁家神代めく
若水桶も小さき輪飾
にほひ鳥ほゝ笑む梅を夢ふらん

謹而擬震題

赤羽 松堂

居蘇三日夜さは稻穂む田舎かな
初苗かゞやく大村小村かな

俳諧三つ物

只野 閨月

初寒や波も静けき大八洲
今朝あらたまる露の松風
雄煮三輪田居も草家もことほきて

只野 閨月

朝ぼらけ居蘇の香滿ちぬ村十戸
初鳥の聲豊かなる田家かな
初詣鈴の音たけぬ野の祠
福壽草鼓か軒端に匂ふ朝

酒井 耕影

郷の家は平和に明けて初日影

曙や鳥犬和する田の庵り
郷樹の家も旭旗鮮か今朝の春
旭の光り疎林の草舎影りぬ
朝ぼらけ田家のほそり紫雲立つ

柴原 梅蔭

初鳥聞けむ藁葺き屋根の香す
十の敷違ひて羽子を突く子哉
書初めの永字八方力あり
花う七五三の百萬兩を土産かな
小社は總代斗り 初詣で

佐藤 さらよ

野も山も初日影さす田家かな
あけぼのゝ櫻うつくし繪にも文にも
田草さり見渡す今朝の廣さかな
黄金の實のりゆたかに朝日さす
川の瀬の音の高きや雪の朝

宮田 青波

藁塚の初日の朝影や旗なひく
霜柱くらく家鴨や初日さす
水車の氷柱解けたる春の水

田家の朝

高久晩霞

水ぐらま御代の榮を奏せつゝふもとの村は朝霧を出づ
海沿えの賤が家はのに茜さして天つ國原いま明けそめぬ
にぎはへる煙りも高く初は子に伏屋の鶏も歌まゐらす

只野清

積葉のひとつ／＼に初日影あかるうさして鶏鳴きわたる
野の祠もしかすかにゆらめきてあかつきまゐる部の人々
村百戸屠蘇のかをりの深ひて朝行く人の顔赤う照る
天盃を受けし翁を上座にて屠蘇を酌みけり賤か家の春

佐川満壽莊

あさ戸押すのき端にちかきむかつをのそらくれない旭はいてんどす
窓らかきむかつをのへにあかねさし野はしもしろさあさあけのそら

山部正勇

おはらけく竝ぶ積葉打ちふまへ聲々うたふ曉の鶏

萩原たけ

口笛を吹きつゝ

片寄歌二

貧しい者にとつて、口笛は一等い、音楽である
それは高貴な楽器をしない。限られた場所に出
ててはなくてもよい。貧乏な衣裳に苦心する必要
もない。

ただ、燃ゆる血の通ふ紅い唇と舌と頬とを道し
て胸中の情熱を吹奏する喜びは何にも替へられな
い程である。

私は朝七時に仕事を始め、一日の勤務を終へる
のが大い、夜遅くである。

光明を想像する、朝の光を、胸一杯に呼吸して
出かけた私は朝の金盞のやうな月夜、金の紙を刺
したやうな星、闘争者の心やうに陰惨な雲影平
和なる海面の、漣のやうな雲を空に見、口笛をふ
きながら歸へることが多い。

勤務！ 疲弊！ 生活苦！

無心なる口笛の吹奏は何時か私の心を注脱の境
に達す。

げだろー。その口笛さへ吹くのを忘れて歸られ
ばならない憂鬱の日のあることは、何と悲しい
ではないか！

私は口笛を吹く！

野に出て、山に出て、
川を下つて、砂原に立つて。

丘のほとりて、沼のほとりて。

それから、乳色の街燈のひかる街路で、汽車の

豊の秋けむるかまごにもぎはひてあしたすがしき小山田の家
鶏の聲さやかに明けて小山田の家なごやかに初日照りそふ

佐藤みらよ

山岸の賤かわりやに立つ煙明け行く空にゆるうのぼるも
あきらけく治まる御代の初日影くまなくてらす賤がふせやを

澤本富之助

この朝心なごみて茶を吸る霜ぞけ半音のいみじき
父母と酒くみ交しこの朝貧しく生くる身を寂にます
山峽の村は煙のたゆたひて露こし見ゆれ陽はのぼりつゝ

島木眞之

あかどきの片割月の静けさよ村一ぱいの鶏の聲
朝明の月牙え照れる庭木々の梢を這へる朝飯の煙
曉の雲の散りゆく静けさよたかごを群れて行く鳥のあり

柴田羊臺

稲田吹く風もいつしか静まりて晴れ渡りたる今日の朝哉
山すその白菊にはふ家々に朝げの煙立ち上る見ゆ

坂本三茶

向山の小さき葉家に朝日かけ今あか／＼とさし初めにけり

中で……………

私は口笛の中に全身の情熱を吹きこむ——口笛
は情熱の伴奏ではない。情熱その者、心底そのも
のなのである。

私は『半鐘の五月祭』のヒロインがある陰な監視
生活をつづけながら、週一度の待たるゝ入浴
に三尺四方の湯船の中で子供のやうにび／＼湯
をはねながら、とろりとたつて口笛を吹く心境の
起き得たことを考へて熱涙を浮かべずにはあ
られなかった。

「コンクリートの天井にゆら／＼揺らめく湯の
反射に、無心な瞳をなげたら、獲ひて作つた
のさかさがいつの間にかほんさの恍惚さに變つて
静かに私の血管を流れ始めた。私は天井に向けた
ままの顔の中で、唇をすぼめた、四人であること
をつい忘れて口笛を吹いた。

と、意外にも——壁の向ふで、口笛の響が聴こ
えた。」

四人であることを忘れて！
口笛をふきつゝ！

ゴキイの小説にはよく、その主人公が労働の
ひまに、口笛をふきながら、想ひをやることが書
いてあつた。

口笛！

私の唇から！
情熱のリズム！

くちぶいは魂をふく、魂を慰める。
くちぶいは友を呼び、愛人を呼ぶ。

四五軒のわら家の屋根ゆ立ち昇る煙に明くる山裾の里
既へに葉切り居れば羽ばたきて鶏は鳥屋より走り出てたり

柴原星子

打ちなびく御旗朝日に新たなり松の緑も色まじつゝ
あさ煙り千町田遠くなびきつゝ千代のためしの豊かなりけり

渡邊 確太郎

柿のもとに積葉掛けし蔵の背戸霜白うして百鳥の鳴きけり
黎明の春おとづれる田の家に鶏鳴きて日の出づる頃

清水 綾子

あまざらう光はとほし田の家の上にかゝれる雲のけだかさ
向ふやまの木ぬれに居りて鳴く百千鳥の聲すみ通る村の朝かな

清野 榮二

大御典を擧りてこそはざし門邊に朝の陽かけ充ちけり
みちのくの山の小田にも豊げくぞみのれる秋を祝ふ朝かな

宮田 誠吉

おゝ父も健かにして子等と居る葉打つ納屋に朝日さしくる
朝な々々見なれし遠の賤か家も霞の中に静かに明けぬ
今朝に食す雑煮の若菜摘まんでふ菜の早き野着姿かな

新半の式ゆく子等の足かろく裳ひるかへす霜の畔道

佐藤 義家

畝のはれに馬の嘶きすべらけく朝のなごみはしばしつゝくも
垣ぬちの展さに未だくたかげの見えなく庭に霜のみ白し
起き出でて見る庭の面に霜白く縁の近きに南天の赤き

春

巖谷 小波

櫻咲く日本に生る男かな
春の夜や湯の香床しき肘枕
お嘶しも藝の中なる花庭
春もまた浅瀬に寒き渡船かな
馬賃して雲雀仰ぐや暇道

口笛は赤愛犬を呼ぶ。

口笛なぐくの無作法と云つた時代はない
口笛は何と大衆的な音楽ではないか。何と情熱
的な音楽ではないか。
友よ、口笛をふかう。

DIARYに現はれた混沌氏

とその周囲

松本 純一

一月二十七日

好問の吉野氏を小林直人と石川と連立つて月を
浴びた青戸に訪れた、わだかまりない對話で静寂
な人なつこさに酔ふて深夜中近く帰宅した、混沌
はいい首をたぐり、殊に妻君なんかの氣持がたまらな
くいんぞ。

二月十三日

午後より好問の吉野氏を訪れる、「路傍詩」で
自分を特別扱いにするなと言ふ、私は勿論そんな
ことはしないと言へる、野郎めさくする夕陽に
はべつて田園生活の詩劇化を説かれる。ほど火を
ふつとふいて私はうなづいた。

四月四日

午後高瀬が混沌さんを連れてくる、来たついで
に路傍詩の原稿を渡して呉れる、感受性の根強い
自分には聞へられない、事だが詩の明るい衝動だけ
は受得られるのを確信さういふことに就いて考へて
見た。

四月十三日

混沌さんから歸つてきた武ちゃんの土産に田舎
マンガユウがふたいる揃へてあつた。

四月二十四日

混沌の家へ洋服で訪ねた自分を酷く煩はしく感
じました、赤飯と餅を喰へてきた私の腹がしい食
慾は灰色に映きかけた、梨花にすつかり弄られま
した。

六月八日

口いづばい飽張つてなんかの生殖器みたいな足
を手掴みだ、馴れた空は青くたれてとかげの足
裏が土を忍んでくる、戻りの道は月を満へて武
ちゃん野ちゃんの影で賑やかだつた。

六月十三日

静男と混沌の家へ香烟を定すべくゆく、ミッドと
砂糖の歡宴は混沌のしはかれた眼鏡にさうするみ
を覚へられた。

七月十日

暑い盛りを踏んで汗手に掴まれた菊草山、三野氏
は晝寝を叩いて遠い眼をこする、その眼は端な
くも私の背しいイモリヤを照取る、型の煩悩に
念がし中から詩をもらつて軽い前髪の煙色の空
に舞戻る、踏まいた白。

八月二日

高瀬さん、かしこさんと三人で好問の混沌氏を訪
れる、興味つなぎの盛、躍動と「パン」の控筆に代
ゆる「血の控筆」を言らに教へ来る、やゝ面壁しに
なり一箇男手のかいてかつを、一匹料理し野郎混
迷たる刺身の惣菜に疲きのごをならす、背「キッ
ストの僕」ならんや。

八月八日

土の性霊に生活の伸びを快く割つて呉れる混沌
の家につぎの妻木、高瀬、中野、島田、私、清影
に鳴るッで型の尻に白く切り満ちたころを
投げ出す、皆んな手は野性に脱衣を刷々とから
けてはつぎの「マ」を道かける「つばい空」——野
放せる自然劇。

未完——

雪

館 高 重

ゆき
まつしろな雪

去年も 今年も
おんなじやうな氣持に
なかせるんだな——
そうさわたし一人が

雲

深 川 秀 邦

今日も雲は流れてゐる
悠然とあせらずどこ迄も雄大である。
雲は白く
素晴らしく白く！
時には黒く又灰色に紫に染る事もあるが
凝つと見つめてゐると何處迄も白く！
悠々と流れてゐる雲は
神戸から遠く紀伊半島を過ぎ
遙々と大洋の彼方へ消えてゆく

晴 日 に

深く濃んだ寂寥が
かすかにかすかにおのゝいてゐる

冬

河 田 正

冬の遠吠が夜の街を囁んでゐる
しやぶられた骨、骨。
凍雲の罅隙から
唐辛子を喰つた二十日月がめまひする
黒血。

何するでも無くちつと窓邊に寄つてゐる寸時に。
雲はいつでもむつとりしてゐる
併しむつとりした其の顔に

無限の慈愛の微笑が潜んでゐる
その微笑と見るのは私許りかも知れない
その微笑は母の様に寛大である
大暴風の夜の雲にすら
その微笑は見えてゐるもの
雲はむつつりと微笑を見せて
ゆつたりと流れてゐる

夜 半 の 雨

日 野 草 笛

いんさんで夜氣は天井に
暗い幕場を築き上げ
晴やかな懷想も
あをぐろしき死の情慾にもろくもやかれ
不氣味な肉のにはいは凍りて
あゝ悲しげに震へてゐる震へてゐる
痛ましい凋落のひゞき軒にくづれ
朽ちゆくものゝリズムが
冷たく低くもれくるよ
重々しいその音調に

廣 小 路

高 木 風 外

上野廣小路——
此所は
官覺と官覺と
相觸れて火花と成る所！
女の官覺は
シルバー・ライン！
男の官覺は
ゴールド・ライン！
女の火花は
松葉をはちく線香火花！
男の火花は
燐の焰の紫！
スパーク！
スパーク！
上野廣小路——
形而下戀愛合戦が
マンジ巴の渦をまく所！

六 人 の 女 給

中 山 世 志 子

街立の鉢の木の整列したかげがよかつたので木枯のやうに飛

びこんで
陣どる三人だった——
客のないさびれた店には女給が六人
雀押しに三人をとりかこんだ
窓のガラス越しに
街路の人足に注意してゐる私と
女給を相手に話す兄と
たばこばかりふかす
私に遠慮してゐる兄の友達。
——競馬場にいつたの
たいした男いなかつてよ
ふじぎぬのワイシャツの男
たつた一人ねえ——
口々の男性の評價に
たゞ私は
六人の女の顔を交はる／＼覗いた。

十字架を負ふ

——プロレタリアのために——

永井夢邦

蜘蛛よ
おまへはいつ迄待つてゐるのだ
偉大な運命の肯定者！
只あせり、只もがく

三條河原の夢

——F子に捧ぐ——

島頭さみ雄

河原の風にそよいでゐる
一茎のみなし草
おまへには私の寂しい心も解らないで
スタ／＼橋を通り過ぎてゆく
おまへと私の隔たりを
三歳の秋まで知らぬとは
せめて河原に下りてきて
色さめたみなし草を
根ぐるみむしつて捨てておくれ
河原の風にそよいでゐる
草は皆んな泣いてゐる

野にたづみ

片寄耿二

どこまでも青く澄んだ空である

そうでない人間がどこにゐるか。
取りすました倫理の凡動、駄動、愚動！
あつ、もう、もう
おれは眞平だ。
偽善者め！

生きたる者——もがく者だ。
生きたる者——のた打ち廻る者だ。
価値があらうとせうからうと
構つてゐられない青白い喘ぎが生活の刻印なのだ

蜘蛛よ、だが……

餌がかゝつたねえ

憐れむべき弱い生物が——。

おまへは

よもやそれを喰べるのではあるまい。

おまへにその権利はない筈だ。

……だが、おれは見た

おまへは平氣でそれをムシヤムシヤ食べた。

運命なんだ！

おまへの眼はそう語るが

あゝ哀れな呪はれた群！ 存在よ！

蜘蛛に捉へられやうとすると群

魂よ！

目に見えぬ巢に氣をつけろ

雨上りのぬかるんだ野路に

はかばかと暖いはれやかな陽の輝きがある

ボブラの葉の影に冷めたような風がひそみ

(それは廣野に一本きり立ちて空に向ひ合掌して居る

様な樹の姿)

おさいきれない程すがしい感情の湧く風景である

伸びるだけ伸びようとする草の芽は草むらに朽ちた

姿をかくし

(季節が置き忘れた悲しい腐った記念品である)

私の目の前に腹をひらめかして飛ぶ鳥の一群もある。

永らくの雨にぬれ勢れた私の心が

今日の青く澄んだ空色に乾き

鳥の群と共に青空に飛びたい様な軽い氣持になる

暖かい太陽のひは野に立てる農家の鍬の先にきらめき

地と空と溢れたすがすがしい感謝にたひるとき

そこには限らない田園の幸福が生れるのである。

紫の梅

トツレファンバ車南詩
No. 1

中山世志子	佐藤清子	旦野草笛	鈴木佐代子	坂本直枝	小杉露子	清水綾子	泉月緒子	水町冷子
-------	------	------	-------	------	------	------	------	------

目下五町平藤島福

社梅の紫 内社南詩

陸月集

ふたごゝろ

正八重子

戀ひまじき人を思ひしいやはてのこの苦しさを何となすべき
夜となれば潮の音たかし波もまた狂ふにあらむ我が胸に似て
はねつるべ水くむ事にやゝなれし今日はも歸へる日とはなりぬる
これやこの許るされがたき想ひかな君にいだけこのふたごころ
秋たちぬ野にも山にも巷にもさてはつれなき君が胸にも

冬の夜

水町冷子

月の冴ね一しはならず今宵此の十六夜月をよもすがら見む
ひたぶるに冬の夜毎の星空をなつかしみ見る乙女の言れは
いたつきのこの方凡て苦じかな思ひ出いど悲しきかもよ
しろかねのヘヤビンの光り冷えびいと吾が胸ぬちに溶けて流る
言ひ出でず亂るゝ心ひたすらにしづめんとこそ日々思ひぬ

高木風外

群山の枯草山の春明りの未だ見ぬ居る夕まぐれかも
かき暮れし枯草山のまぐらも風生れそめし音の聞ゆる
霜除けの焚火するならし桑畑の深處に聲するまぐらりかも

北風が吹く

賀澤好富佐

寒い北風が思ふさま吹くと
庭にきてなく
雀が戀しい
あゝ雀のように。

憧憬

あゝ賑やかに
笑ひる人は幸福だ
一瞬でも良い
太鼓のように心から笑つて見よう
どうしても秋は淋しい

思ひ出の冬

石井賢三

肌寒い夜も
寒星はまたざさする
その下に
我れと彼の女
紅燈淡く揺れり
寂しい月
ひそやかに二人見ぬ
x x

哀慕秘篇

前田重夫

道のへの低くしげれる合歡の木にどぎてしづむ夕埃かも
待つとなくおのれあゆみをゆるめつゝ夕かげふかき坂のぼるなり
この日ごろ兄を失なひてうちしづむきみをまきめに我は見がたし
きみが兄を奪ひ行きけむ秋風の音をさみしく我もさゝけり

年頭所感

柴田羊臺

幼な子を教へ教へて古びたる机のそばに年老いて行く
改まる年とこそ云へはかなきは白さを増せる吾が髪にして
明からす通ふ林もはの見えて里の藁家に入り起きぬらし
晴れ渡る野にも山にも置く霜の真白に見ゆる里の朝哉

雑詠

佐川満壽莊

しもじろきかと田のおもにむらすゆめにあさるらんこゑかしまじき
作男らはあさげたくまを爐によりてけふなすわざのついで語り居り
里人のそよごしいのかみがきにあさかせにはり注連のさゆらぐ
けさもまたほしものすなり廣にはの日なたにむるゝ鶴を追ひつゝ

追憶の涙

水町冷子

夜のじまの一頁
饒舌の後はさびしかり
追憶は我身をそこへ
歎びと悲しみとわびしさの
三部曲をかなでつゝ
うつすらと涙はにじみ
冷く頬をつたひゆく
夜のじまの一頁
饒舌の後はさびしかり
ありし日の追憶は

篠原に真日澄みとはり霜雪しきりに落つる其處にも此所にも

初めての接吻
我れはしる唇の
いかに小さく
いかに軟かなりしを
今は春となれど
その樂じい冬の一夜
忘れざりし我れは
片思ひ
何時も
彼女は
柳に風の吹流です

愛日行

白木英尾

しんかんとうつろな心かくしもちづ／＼行くも冬明りの道
つぶら實のおのおのものは愛さる白南天ぞわれかたはむ
冬ごもりかくてかくして過ぎたむ母と吾との静かなくらし
あたゝかく冬日さす庭はし籠のきりばしあまく匂うてゐるも
大寒となりて背戸もは雪の屑もかたく凍りてどけ暮れけり

雪も喜び

澤本富之助

初めてに降る雪なれば校庭に遊べる兒等は狂ひ躍るも
初戀よ悲戀にてあれおしなべて哀しきに生きまこと尊し
女上等の唄ににじめる寂しさよおゝひたすらに唄へ娘よ

雑詠

渡邊 確太郎

硝子戸の曇りぬぐへばちら／＼と冬の濱邊を雪降れる見ゆ
濱霧の深く罩めけむ朝より閉じたる縁の隙子とめりぬ
濱に來て海鳴りの音かしましき家を離れて寝ねがてぬかも
濱寺の上りつめたる奥津城は文字うすらぎて潮苦むせり

涙と共に流れ去りゆく

孤獨

裏切られた人は云ふ
人間はやはり孤獨なんだ
信じたのは自分が悪いのさ
でもなほ何を求めずには……
人間はやはり弱いものなんだ
裏切られた人は云ふ

思ひ

深 間 澄

夕ぐれ陽の光
そはまこと
我が胸を淋しませるよ
されど
明るき灯の光
そは まこと
我が胸をくくるはさせよ
されば……
われいづれの
ひを戀ふべき

雑詠

島 末 眞之

うたゝねの輕きつかれにながな忍ゆ眺めし晝の月かな
白壁にうつりし湯氣を眺めつゝ静けき風呂に心安しも
ぬるり邊に生栗くべて都より歸えりし友と語る夜はも
師の君に送る玉章今一度裏かえし見ぬポストの前にて

雪

佐藤 清子

枝たわに雪を受けたる小松の上南天の實のたわみとゞく
行けどゆけどうら寂しくも雪のある陸奥路の旅につかれて來たり
雪ふりてきらら明るき硝子戸に影さしてとぶ鳥の多きも
野の果を低ふ並べる松原に雪つもるみゆ園のごとくも

洗ひ忘れむ

諸 根 樟 一

霜凍る師走の眞夜を火に追はる奇しき運命と云ひ棄つべきや
燒跡にたゞ黙しつゝ十年の原稿拾ふがこゝろはや
カーライルニユートンもかく有りけむと一片の灰燼見つゝを歎く
積雪の大野路走る自動車は淋しきこゝろ載せて急ぐも
玉山のいで湯にわびし獨り寝の枕邊近きせゝらぎの音

夢!!

水木紋四郎

コロリンシャンと流れくる
その音の悲しさよ
私は聞いてゐると
寂しくなる 何故か知らない
コロリンシャン……………
細き白い手に起る
その HARONY
秋の一夜
琴の音はほんとに悲しい
私は耳澄ましてると
死にたくなる 何故か知らない
コロリンシヤアン……………
コロリンシヤアン……………
おゝ 其の音
音にこむる夢よ

海原に立ちて

鈴木すみ子

わたしの愛したあの人
遠い／＼お國の方よ
いくらあせれど船は出た
わたしの岸に残されて

詩南車詠草

雪

高久 晩霞

床ぬちに吾が顔の冷えたならす戸を打つ風の雪ふくむらし
しんじんと降り出し雪はまなかひに古き追憶を積み重ねつゝ
新春にふさわしく雪は降りたれ家なりどもす風のあさまし
松に積もる雪の風情はさりながら挽める枝のころもとなき
冬の吹雪春のあわ雪かにかくに幼なき北の思ひ出さびし

新舞子にて

萩原 たけ

師走晴れいざなはれては砂白き舞子の濱に地引き暮らしぬ
うら枯れのあしのそよぎの音だにもなやめる人の子にさびしかり
たつきにさすなごる葉をいつよりかならひそめけむ濱の女の子
かざろひの夕方まで遠方に星かどまがふ沖ついで火
我れしはあまどなばや沖にしてたかまと思ふ胸のいさ火
銀鱗のおどるもあはれびくぬちに只一さきのはかなきに
只一もと咲ける撫子愛しみて手折しまゝに家づとにせん

何故に泣くの知らないが
いつも海邊の砂丘に
青い／＼海原ながめては
はろりと流れる松の露
私は一人じよんぱりと
何時もかはらぬ海原を
戀しい／＼あの方の
幻たづねて道ひぬ

佐平次捕物帳

(磐城文壇漫評)
夢野 夢之介

大正十一年、十一月、山村暮鳥が「みづく」を出して今年八年。その間重つたものなく、唯々草野心平が銅鑼の何號（記憶にない）だかを出した切りで混沌として振はなかつた。
近時漸く、文學意識に目覺め、無軌道、詩南車、表現人の出現を見る。現在「みづく」時代の如く非宣傳的でなくそれだけ範圍が廣く、進出的である。今その範圍に現はれる人々をその作品を通じて憶測し御批評申上げる。勿論客觀的に他山の石である、泣き言を云はぬ様に第一番に

雜詠

佐藤 とらよ

雨やみし朝靜かに水汲めば初音のもろく背戸の竹やぶ
菜洗ふて出でし小川の水澄みて波立たするにおき今朝かな
枯枝に残る熟柿の二三つめじろついはむ朝の靜も
寒空をかや刈る駒に打のりてこのゝめ空を歌流し行く

雪、鳥、喜

宮田 青波

雪のふり降りてま白と野つかさの常には著き變電所なるも
音立つるは磁力線ゆのうなみのみあはれ増しつゝ雪の降り積む
ラッセルの動き初めしと新聞を母と見入つゝ子等を思ひぬ
雪ふくむ風吹き通る室ぬちのせきせいんこの啼も少し
妹の歩みはかなし夕やけの山路はるかに啼くは閑古鳥
受付に顔のみ見せし看護婦の後に大きな龍のいんこは
仲人の申るよろこびをつぎに居て幾なる人の面わさぐも
心好く舌にまつはり流れゆく君持て來てふ赤きうま酒

睦月の花

佐藤 義家

古井戸に陽炎につや淡日ころ朽ちはてし井桁にさ雪のころも
古井戸のもこくろより繁る樹は移ならし風にさめく
ふかき夜の床ぬち誌など見てあればはるけきかたに雁鳴くこげし
戸の間ちるさむ風すさび去りやますおちごの林なりやまぬなり

▲三野混沌君 何と云つても磐城文壇の人々を論ずる時、先づ第一に君を挙げねばならぬまい、君は所謂アナ詩人として中央に名を出してゐる人だ。
いゝ性格らしい、おどろく落ち付いてゐる、この人の癖は「他同人誌に書くのは餘技の餘技だ」と云ふ様な態度がチョイ／＼見える事だ、これさい無かつたなら君は全然磐城文壇の異彩である。
然し詩は何と云つても第一人者である
▲高瀬勝男君 君は大變無盡しい事を得意になつて書いてゐる様だが、果して何人の者が読んで呉れるか。
これを讀む様な者は「改造」あたりを讀みこなす人々ある、その人達から見ればカラ値打がない、も少し現實に即した獨創的な事を、初歩的でもいゝから書く様にしたまひ、然し評論は先づ君より外はない。
▲中野勇雄君 君はアナキストらしいが、そうでもないらしい。學植もあるらしいが未だお歳が若い。
君の所謂階級詩の目的意識を論ぜられ君の作品には少しも新しき階級意識がない、詩南車の詩を貶してゐる所を

耕地整理

人足のつき／＼つゝ、つゞつ道理め立て土の台車を押して行く
耕地整理八分どゝのふ何れを見ても樹目たゞしく展らけてありぬ

三首 (破調)

目映いな無精にうれしいこ雪はれ小供が次郎太郎と叫んでる鎌入の日だ
木小屋の空で雀は躍るあすもあさつても望ましいぬぐみ
冬穀を集めた爺こんどは焚く番だごの子から出た欠伸のどかで長い

かなしき文人の新年

小泉貢

氣のりせぬ縁談叔母にせまられて夜の酒場に飲み更けしかな
溜りたる酒場の拂ひすましては明日おもしろ金なき新年
踏場無き迄にちからわが部屋を片付けんかな元旦なれば
無理押しに書かんぞすれど纏らず今日も空しく紙を裂きたり

折々を

旦野八千代

本立深き林の奥に我が歩む足音のみただわびしうひびく
新らしき街を行きなば新らしき心にならむなぞ里ハ見ぬ
まさびしき心抱きて歸り來しが吾をなぐさむる何物もなし
讀み終えて書を閉ぢたる其の音にさそはれし如愁ひ湧き來ぬ

俳句

瀬谷一夢

髯剃つて平凡に年迎へけり
屠蘇にはろ酔ふ草薺の臣
梅薫る園は薬家の奢りにて

帝都雜感

八島蘭外

引札の冬枯るゝ町風に飛ぶ
立ちつ食ひやみんな師走の迫り顔
冬空や木立の奥の白聖館
引越の右往左往や師走町
植木提けて師走の都知らまこそ
明治神宮參道神橋にて
神橋や紅葉散り敷く水清き
同神宮にて
小春風で砂利に塵なし神の道
松柏冬されもなし大社

春淺し

片寄文志樓

不祥にも着ふくれて吾が春淺し
みぞろゝや伊勢路の春の後戻り

見ると大した詩人でもなさそうだが。
(社會教養も足りないせいもあるだらうが) 非謗的な、自惚れた批評は、少し立派な作品を書くやうになつてからに致しませう。
▲石川武夫君 君の詩には獨創的な書かゝねばならぬ衝動に依つて書く云ふやうない、所がある。良い詩人である。今一段の努力を乞ふ。
▲松本純一君 文章が、いゝがまだ足りない所がある。君は「ヨイ」無盡しい事を書きたがる癖がある、歳の若いせいもあるだらうが、まづ「中詩人」である、大でも小でもない。
▲馬場卯一郎君 いくらか氣取り詩人らしい、然し素質は悪くない表現人二號出した切、普沙汰ない所見るとデイレツタンテイズムの人であつたかも知れぬ。
▲片寄歌二君 君は以前大變無盡かしい字句に取らばれた詩を書いておつたが詩に對する研究をいくらか譯つたせいか近頃餘程落着いた素直な詩を書く様になつた。
良い詩人である。今一層精進せられよ (二十三頁へ續く)

梅花點々江南の水やゝぬるむ
浦島が樓家だづねん薄かすみ
露の雪瀧おとして高音かな
凍解けや梅にすべりし下駄の跡
美濃の山近所の里やうかれ猫
若草に足投げ出して唱歌かな
加茂川は温みぬ京はいよゝ春

佐川満壽莊

元旦や里の子達の赤い帯
里川の水のきよきよ初手水
百姓どはかきつけけり今朝の春
牛小舎の牛のつのもはつ日哉
梅さくや薬屋ののきはつ日哉
霜けふる門田の朝やむらすみ
笹なくやむまの蔭のやぶたゝみ
初からす森に旭紅き村社かな

新年雜詠

高久柳雪

元旦や松に晦日の聲もなく
新正にふさわ庭の雪五寸
辯慶も羽子の相手や新田町
蓬菜の夢や恵方に鶏の聲
門毎に猿引き廻し御慶かな

春寒や峯に淋じきまだら雪
春立てごいでたち冬の野山かな
菜を洗ふ女の聲や 春寒に
春寒や降りにし雪の消ながたく
あわ雪の風もつれなき寒さかな

酒井耕影

時化風きを旭に飛べり磯千鳥
烟這ふ洲の宮柳綠せり
代々幡の杜の一廊梅早し
煌けど頬風しみて春淺し

歲旦

赤羽松堂

天杯にことほく屠蘇や君が春
二日
初夢や四百餘洲の豚屠る
人日
人日や久方振りの門禮者

雜詠

佐藤 くらよ

うたひ女のうきよを渡る寒けいこ

霜風の林にひゞく銃の音
寒習ひ障子に落す聲太し

近作句屑

坂本三茶

薄水や落葉沈める 手水鉢
馬の背に解けもねせず霞かな
薫漬る夕一ト時の霞かな
短日のあはたゞしくも暮色哉
乾柿に暮るる短日の陽さしかな
山茶花に西風風の陽影靜かなり

すがれなすび

高木風外

川霧や友あり應とこたへけり
幹打てばほろゝ散るなり百日紅
すがれ茄子虚空の風に吹かれけり
露ふつて刈るもろこしや水明り
そこらこはだけ地割れし秋旱
十月や草觸れやすきそよぎして

蟲の聲きいてわびしきはだか風呂
綿入の出来ぬ寒さや初しぐれ
群雀しきりにさわぐ空低し
泣くなとて泣くふをつねる子守かな

時雨

柴田羊臺

傘さして子の歸るさを待つ時雨
時雨るるや子等は洗足でかへりけり
山路や子等急くなり時雨宿

水仙花

本多朝忠

南縁のこゝまに咲くや水仙花
水仙花未だふりやまぬ雪なりき
水仙の花ゆめにみこ小女かな

俳句

何 鳴

しみみと小春の芝に轉ばりし
闇汁に何か怪しきにはひかな
霜しめり重き木の葉を掃きにけり
朝霜に爪たて、摘む青葉かな

雜吟

清野榮二

遠近に犬の聲する宿寒哉
旅鳥のねぐらを急ぐ秋の暮
よく見ゆる山の地肌や冬風て
福壽草亙て土坤きて咲きにけり
初雪や檜板ばかり白く見ゆ

北斗莊小情

赤羽松堂

俳諧三つ物 三 吟

爐開きや心盡しの北斗莊
 統てこしたる淡き湯豆腐
 月花の道一と筋に學ふらん

京都素秋
松堂
名古屋方外

歌仙
青麥の卷兩吟

青麥や軒端にせまる北斗莊
舟の小鮎を貰ふ川岸
永き日を酒債食ら興ありて
馬奴の手綱は馬の曳くまゝ
折角の月は雲間に宿りけり
圓にむきたる策のゆて栗

守松 守松 守松
種堂 種堂 種堂

創作 寄附金

林 總 一 郎

お春の日光が日眩い、村の一面のげんげの花で、それがきれいに光つてゐる、坂を登つて寺の門の前まで来ると、金治はちよつと立止つた、そして、後をよりかへつて、「早く来んか！」と半町ほどおくれで来る松吉やお春のおれんたちの方へ聲を掛けた、「今行くがな。さきへ入つて行きたい」とお春が答へた。それから何やら三人で云つたと思ふと、大聲でドツと笑つた。

「阿呆が！」

金治も笑ひながら咳いた。やつと三人は門の所まで来た。「何を笑つとつたんぢや？」お前のことを笑つたんぢやない松吉が答へた。

金治はチラとおれんの顔を見た。頬が上氣して赤くなつてゐる、その頬を手で撫でやつたら、汗であたゝかく濡つてゐるのかも知れない、何しろ可愛い、娘だ、と思つた。

門を入ると、廣い境内にも日光が溢れてゐた。誰も参詣人はない、正面の本堂の階段の中から、ひさしの影がクツキリ染まつてゐる。

「しづかぢや」

松吉はそう云つて本堂の方へ進んで行つた。

お春はおれんを誘つてその後を追つた。

金治は、ふと右手の鐘樓のうしろに、新しい板札が建つてゐるのを見た。

「あつちへ行かふ」金治は何だか苦しくなつて、他へ行きたくなつた、と云ふのは、板札の一番おしまひに金治の父の名が「金四拾錢也」として申譯みだひに書つてあるのを女に見られるのが面白くなかつたからだ、三百圓と四拾錢では比べ物にならない過ぎる。「うちは五圓ぢや」たれんは自分の父の名を板札の上に指しながら笑つた。

「ふむ。好むがな。」が、突然、不思議な憤りが湧いて来た。札の筆頭に「三百圓」麗々しく、太筆で書かれた地主の名を見詰めるが、それを書いた和尚の顔を思ひ出したからだつた。先達の年貢争ひで、いきり立つた村の若者共をなだめたのは此和尚だつた。

「食ひ物の事で殺氣立つのは浅いと思ひなさんか。」

和尚の理窟はちやんと筋立つてゐた「村の平和」とか「美しい人情」とか「土に親しむ者の幸福」とか「自然を友とする有難さ」とかを要するに百姓の幸福は取れる米高にあるのではない。百姓の誇りは、物質に貧しくして自然に恵まれる所にある。といふやうな説教だつた。

人格の高い和尚さんが、佛の道理で説いたのだから、みんな地主本村に反抗するのを止めた。それでこの村の百姓たちは益々食物のない苦しい浮世を、來世のために辛抱してゐるのだ。

だから地主は「三百圓」でも「五百圓」でも寄附する他はない何故なら、地主は浮世でちつとも苦勞しないのだから、成るべく寄附を澤山して極樂へ行けるやうにお寺の御機嫌を取らねばならない。

「畜生、馬鹿にしてやがる」

金治は和尚が地主の寄附の三百圓を、有難さうに連名の筆

「おい」と彼は松吉を呼び止めて「あれは何ぢや？」とその板札の方を指した。

「あれか、寄附の名前ぢや。行つてみい、お前の名も出てゐるぞ」

「何の寄附——あ、さうか」

この冬、本堂の屋根を修繕すると云つて和尚さんが寄附金を集めてまわつてゐたのを思ひ出した。金治の家では四拾錢寄附した筈だ。

金治がひとり鐘樓の背ろに行つて、寄附者の名と金額を掲示した板札を眺めてゐると、おれんが何時の間にか側に來て一緒に板札を見上げてゐた。

「おそのは？」と金治は訊いた。

「兄さんとお墓の方へ」と答へて、何氣なさうに札を見つければ「まあ、三百圓」と嘆息するやうに云つた。今好い機会だ、と金治は思つた。そばには誰も邪魔者はゐない。そつとおれんの手を握ればそれで好いのだ。だが……

斯ういふ機会もありはせぬかと云ふ心で金治は今日彼らを誘つてお寺詣りなんかやつたのだ卯月八日といふので甘茶でも和尚さんに振舞つて貰はうといふ口實もあつた。

金治の妹のおそのが松吉の嫁にならないう前から、金治はおれんが好きだつた。金治が妹を松吉にやつたのだから松吉はその妹のおれんを金治に呉れるのが當然だといふやうな理窟もないのだから、彼らの間に縁談らしい話はまだ持上つてゐない。何しろ、金治は水飲み百姓だが、松吉は小いながら地主の一人なのだ。

「矢張りゐらぬ。木村の旦那は三百圓も寄附しとるさる」おれんは再び云つた。

頭に書いてゐる心根が分つたやうな氣がした。

いやハツキリ分つた。

お寺だつて金持ちのためにあるのだ。佛さまの道さへ、地主が小作人から搾り取るための理窟に役だけの物なんだ！地主を肥やさなければ、お布施や寄附金を澤山して貰へぬから、和尚も一生懸命に、小作人の反抗を押し止めたのだ。

「おい、こつち「來んか」」

松吉が呼んでゐる、見ると、本堂の縁側で和尚と松吉夫婦が話してゐる。金治は無言でその方へ行つた。

階段を上つて、ひさしの影に入ると急に冷つこい感じが頭から腹の底にまで沁み込んだ。おれんの下駄の音の階段を踏んで來るのがうしろに聴えた。

「どうなすつた顔いろがわるい」と和尚はニコ／＼しながら「まあ、甘茶でも召し上れ」見ると松吉たちの前に湯呑みのせいた盆が置いてある。

「甘茶で釣るのがあんたの手ぢやらう」湯呑み一つ取上げる、それをハツシと和尚に向けて投げ付けた。和尚の膝から下で甘茶で濡れた。

「何をなさる！」

顔色をかへて和尚は立上つた。おれんの下駄の音もハタと止んだ、金治はおれんも驚もあるのか、斯うなつたら松吉でも喧嘩だ、と思つた。

「やさしくして居れば、百姓はいつとも馬鹿にされぬんだ。と、口惜しさに涙を流して齒を喰ひしづつた。

x
+
x
x
x

私は小學校に往き來する途中で、よく蝶子への手紙をその戀人の男から頼まれた。時には男からお金を貰った事もあつた。が、そのお金は何か一種の腹立ちを感じないではゐられなかつた。私は何時もその手紙を夜こつそりと彼女の許に届けるのだつた。

彼女の家は隣村の百姓なのだが、彼女は郵便局に通ふ都合上私の近所の樂屋の二階に下宿してゐた。その室と云ふのはあまり整理されてゐなかつた。はでな浮々しい着物があちこちに吊してあつたり、鏡臺の前などには化粧品や香油の罎や婦人雜誌などが、いかにも亂雑に散らばつてあつた。それはたまに夢のやうな室の感じだつた。

私はその室が何故か好きだつた。そのアトモスフィアは私を少年期から少しづつはなしてしまふやうなびやかさなまめかしさを味はせるのだつた。

「よろこびのお便りです」と出してやるのだつた
「なか／＼皮肉なことを言ふのね」彼女はさう言ひ乍らにこつてゐた

私はそれを渡し乍ら、何時も封皮の字を今更のやうにまんじりと見詰めた、それはあまりに能筆だからである。そして私は何かしら寂しさを覺てしまふのだつた。

「何考へてゐるの」彼女にさう促されて、私ははつとするの

さし上げても御返事とてくださらず——と認めてあつた。
私はそれを讀んでやつと安心した。二人の間か何でもないのでと思ふと、重い雲が一時に晴上つたやうなすが／＼とい氣持になつた。

私は痴人のやうに獨で、たゞ微笑する許りだつた、それから／＼彼女の許に遊びに行つた。そして算術や國語など教はり乍ら、ふと、彼女の指が觸れた時、どんなに少年の胸をときめかし楽しんだ事か！けれども可愛がられる少年の存在として、何時も／＼歸らなければならなかつた。

それから間もなく男は手紙を頼む事を中断してしまつた、が、彼女と彼の時が町に一日毎にひろがつてゆくのみ——あゝどんなに愁しい想ひでさいたことだつたか。

嘘だ、彼女にそんな筈があるものか。さう否定はしてみてもその愁しさを癒す事は不可能だつた。

私は成夜然しい思ひで彼女を訪れた。夜の雨に灯影がうるんでゐる晩だつた。そして私は少年期からあまりにも離れた目で、彼女を敏感に觀察したのだつた。その時私は下腹の幾分膨れてゐる彼女をばつきりと發見したのだつた。

「すべては終つた！」私は既に哀しみを越して言つた。それはあまりに唐突な言葉だつたので彼女には解し得なかつた。その夜から私は彼女が急に賤しい女に思はれたが、それと反對に一層はげしい憂鬱を感じないではゐられなかつた。

だつた。そしてすつかり返辭に困つてしまふのだつた。まさか私はひそかに蝶子さんを戀してゐるのだ。貴女はあまりに戀に鈍感すぎる——とも言へなかつた。

私はその度に彼女の美しいといふより清らかな瞳を凝つて恨めしげに睨んでやつた。私の心はひたすらだつた。私は何もかも全部を彼女に告白したかつた。そしてその果は哀しいことも嬉しいことも自分でも判らない甘く情い涙をこぼしてしまふ事もあつた。

「あら富ちゃん泣いてゐるの！」彼女が不思議相な面持で優しく肩を押へて訊ねた時、私は一層やるせない心地になつた。私はその涙の辯解にあまりにはなれたうとましい事を言はなければならなかつた。

けれどこゝに不思議な事には、決して彼女が男に近事を頼まないことであつた。だが、或は郵便などうまくやつてゐるのではないかと思ふと、まや寂しさはにじみ湧くのだつた。私はその後彼女の手紙を届ける度毎に、一回は一回毎に憂鬱になるのだつた。それ程自分が戀して女のどこへなせ彼の手紙なぞむざ／＼と届けてやるのだ。と考へ、そこに矛盾した哀しい道化役者の自身を發見するのだつた。そして彼女の手紙を頼まれる度に途中で破いてしまふと考へてみたが、やつぱり届けないでは居られなかつた。あまりに弱すぎる、清すぎる、と鞭うち乍ら、それをどうする事も出来ないのだつた。

「蝶子さん僕にもその手紙讀ませない」と或夜私は思ひ切つて言つてみた。私はそれを何氣ない風に言ひたかつたが、頼のはでるのをどうしても感じないではゐられなかつた、けれど彼女は案外平氣だつた。

その手紙は耽美的な長い文句で、その中に本文として、幾回

(十七頁より續く)

▲宮田青波君 アアラの派を引いてゐる歌人である、それにもこれにも手を出さず歌のみに精進してゐるのは敬するに足る、此人の歌には家庭的に恵まれた温和さが目に着く。良い歌人である、クリスチャンと見るは目が努力を乞ふ。

▲佐藤義家君 君は宮田君に次いで、歌人だ、短歌のみに精進してゐる事は詩壇の片寄君と比肩する、要するに君は眞面目な歌人である。

「心の花」二月號に載つた君の歌も決して悪くない、自重せられよ。

▲白木英尾君 君は努力しだいでまだ／＼延びる人である歌質はいゝ、中央に出しても恥かしくないものを出してゐるこの態度で眞剣に進みたまひ

▲旦野草笛君 君は唯一人女性として堂々中央に名を馳せてゐる人だ文章はじつかりしてゐる思想もしつかりしてゐる君の詩歌と云つたより創作、感想方面の第一人者である事を踏じて折紙をつける。

歌もいゝ、詩もいゝ、その態度の眞剣なのは尙更いゝ、群鷄中の一鶴である。自重精進せられよ、君は文人として立派に立てる人だ。

その他島田春夫、石井賢三、新妻青太郎、佐藤清子等の諸君が居られれば何時れ又する事にする。

(暴言多謝)

讀後雜感

曉霞生

敢て還後など申しません仲々秀れた歌稿があります、一方まだだど／＼しいのも可なり見えますお互ひ眞面目に這道に精進致しませう、生意氣に大分添削を施した事と、紙面の都合添削を相違多くした事をお詫び致します、此大さから御寄稿の歌数を制限したいと思ひますから、歌が少なくても自信のある御作を拜見したいと思ひます、只現今の大家と言はるゝ歌人でも文法上の誤りなど平氣で歌ひ飛して居るのを何時も苦々しく思つて居ります、當歌壇の人々にも文法上修辭上相當注意は拂つて頂きたいと思ひます、其點此大さあたりから貧しい批評を加ひて見たいと思つて居ります、口語だか文法だか判らぬ様なのも有ります鮮明に頂きます。

俳句に就いての所感の斷片

松堂生

俳句は文學の一部であり詩である以上其

修辭の巧拙表現の適不適はあるが其根本は各人各個の思想の異なる如く他よりかはこれの批判など出来るものでないそれは創作の權威であり、またそのものの生命である。

然しながら文學として美術の一部なる以上其道に於ける實際の洗練推察せなければならぬのである、これは獨り俳句ばかりでない詩も歌も皆そうである古人は句作の修練の法は「三多」と云ふて居る

一、多く句を讀むこと
一、多く句を作ること
一、多く推敲すること

また俳句の領域は僅かに十七字の小天地であつて歌や詩などを比すべくもあらず、しかも自然を研究し自然を愛して大なる心の心とすひらめきはすべからず短刀直入的の首挺胸的の刹那に於ける微妙なる働きに觸れてこそ俳人としての本領なりと信ずるのである、故に此意味に於て投吟諸君と共に互に研鑽を重ね大に本誌の俳壇に調歩したのであるまたその覺悟です。

消息

宮田青波氏 二月廿廿一日の兩日久し

く離り居られ、妹君、令兄の婚禮のため一時歸平され、見送り乍ら葉參のかねて二日ばかりで水濱地方に遊ばれた常磐の梅、千波の鴨、磯の袖が浦になか／＼浅からぬ印象を残されたこの事佐藤義家氏 近く磐城炭礦會社を退社し、ばら／＼家に居て歌作、親しむ筆、四月の詩展に宮田氏とパンフレットを出す豫定。

八島冬冬氏 關外と改む新住所東京本郷區駒込吉祥寺町一〇

館高重氏 去年十二月十五六兩日全國詩歌人の展覽會を自宅に開催

小泉貢氏 「じま」の編輯人となる向「紫の梅」二號の編輯を受持つ

池田比呂志氏 詩誌「野馬車」一月創刊

向神戶詩人社より詩集出版の旨

永井夢邦氏 金剛詩人社の同人となる

澤本富之助氏 東京府下三河島三六五

蘭田政太郎氏 轉居新同人、四月十日進學の爲上京向展覽會に詩三篇寄す

日進學の爲上京向展覽會に詩三篇寄す

上中信夫氏 文藝誌「草原」一月創刊

詩人社より處女詩集「虹色の回想」出版

八拾錢

大村義一郎氏 文藝誌「樺人」千葉縣市川町五丁目高橋方より創刊

赤羽松堂氏 俳誌「潮聲」平町北目町八九より二月創刊

高木風外氏 詩誌「短唱園」編輯

片寄歌二氏 詩南社パンフレット「紫の梅」創刊

波立一氏 千葉鐵道隊に入營

寄贈深謝

地上樂園、詩展、詩美學、詩人劇場、驛、こまどり、瓜紅、潮十一月、地上樂園、詩原始、未耕地、桔梗、金剛詩人、詩線、驛、詩短冊、途、光と影、マカロニ、こまどり、路(十二月)太陽樹、詩魔、未踏地、詩美學、地平線(仙台)公孫樹、短唱園、赤道、途、青い街、野馬車、詩短冊、乾杯詩、青葱、草原、詩欲、地平線、摺、行進、路、少國比新聞(一月)詩美學、詩人劇場、潮聲、夜會服詩人、短唱園、文藝道、山、青葱芽生(青森)(二月)労働藝術家、櫻樹詩人、文藝道、新世紀藝術公園風景、數風景、瀬戸内海詩人、白路、途、通風、詩短冊、旅浪、青葱、仙人、からたち、芽生、潮、二葉、キネマ文藝、(三月)赤道、驛、子守唄、直線を行く街、青葱、芽生(四月七日迄)

同人

宮田 青波 福島縣平町御治町廿六番地
佐藤 義家 同 七軒町卅二番地
小泉 貢 福島縣石城郡鹿島村
白江 市太郎 東京府下總ノ川下田二二二一堀川方
且野 八千代 同 平町手廻町一二二番地
石井 賢三 大工町十九番地
片寄 歌二 五丁目二十八番地

正誤表

四頁清野菜二氏第一首一句二句御大典家を擧げて訂正、同じ四頁の宮田誠吉氏第一首三句「居る」字等居てと、同じく第三首四句「菜」を葉の早さと訂正す

高久 晚霞氏序
小泉 貢 編輯

詩南社版

沈黙 (じま)

四六判箱入 二百五十頁 定價一圓

(七月上旬發行)

沈黙は我が無名作家諸君の爲めに企圖された唯一の同人集である。我等の作品を一集にして中央文壇に紹介するを目的として生れたものである。

何事によらず詩集、歌集その他單行本を出版するに當りて負擔ばかり掛かりて満足なものを出す事は到底不可能なのである。この意味に於て我等は負擔の節約も大部數發行を主眼として發行致したのである。

勿論我等は有名無名を問はない、唯々我々の微衷を汲んで同人となりて沈黙の立派な生産を援助して下れる人が欲しいのである。同人加盟者の數が一人でも多ければ、それだけ内容の充實した本を作る事が出来るのである。それと同時に新しい機運に向ひつゝある。我が文壇に一大センセーションを與ふれば吾々の本懐之に過ぎたるものなし。

沈黙に加盟すべき人は全て同人とし、歌、創作、原稿用紙二十枚以内、出版分増として金二圓及び時限(一年日、二生地、三著書名の有無、四回刊、五現住所、六近影)を添へて五月初日迄に申込まれし。

發行所 詩南社出版部
福島縣平町五丁目

讀後雜感

曉霞生

敢て還後など、申しません。仲々秀れた歌稿があります、一方まだだど／＼しいのも可なり見えます。お互に其面目に這道に精進致しませう、生意氣に大分添削を施した事、紙面の都合添削を相違多くした事をお詫び致します、此大さから御寄稿の歌数を制限したいと思ひますから、数が少なくても自信のある御作を拜見したいと思ひます、只現今の大家と言はる、歌人でも文法上の誤りなど平気で歌ひ飛して居るのを何時も苦々しく思つて居ります、當歌壇の人々にも文法上修辭上相當注意は拂つて頂きたいと思ひます、其點此大さあたりから貧しい批評を加ひて見度かと思つて居ります、口語だか文語だか判らぬ様なのも有ります鮮明にして頂きます。

俳句に就いての所感の斷片

松堂生

俳句は文學の一部であり詩である以上其

修辭の巧拙表現の適不適はあるが其根本は各人各曲の思想の異なる如く他よりこれの批判など出来るものでないそれは創作の權威であり、またそのものの生命である。

然し、文學として美術の一部なる以上其道に於ける實際の洗練推致せなければならぬのである、これは獨り俳句ばかりでない詩も歌も皆さうである古人は句作の修練の法は「三多」と云ふて居る、一、多く句を讀むこと、二、多く句を作ること、三、多く句を推致すること

また俳句の領域は僅かに十七字の小天地であつて歌や詩などとは比すべくもあらず、しかも自然を研究し自然を愛して大に自然の心を心とするとひらめきはすべからず、短刀直人的の首挺胸的の刹那に於ける微妙なる働きに觸れてこそ俳人としての本領なりと信ずるものである、故に此意味に於て投吟諸君と共に互に研鑽を重ね大に本誌の俳壇に調歩したのであるまたその覺悟です。

消息

宮田青波氏 二月廿廿一日の雨日久し

く離り居る、妹君、今兄の婚儀のため一時歸平、お見送りに來る葉巻をかてて二日ばかり水窪地方に遊ばれた常磐の梅、千波の梅、磯の梅が浦の事な、浅からぬ印象を残された事、佐藤義家氏、近々京城編輯社を退社し、ばらけ家に居て歌作、親む、皇尚四月の詩展に宮田氏、パンフレットを出予定。

- 八島冬全氏 蘭外へ改む新住所東京本郷區駒込吉祥寺町一〇
- 館高重氏 去る一月十六日全日本詩歌人の展覧會に自宅に同席
- 小泉貢氏 じじまの編輯人となる尚「紫」梅二號の編輯を受持つ
- 池田比呂志氏 詩集「野馬車」二月刊
- 永井夢郎氏 詩集出版の事
- 澤本富太郎氏 東京府下三河島三六五
- 日進學の爲に東京府展覧會に詩三篇寄す
- 上中信夫氏 文藝誌「草原」一月刊
- 詩人松本氏 奈良縣宇智郡牧野村金剛八拾社より唐女詩集「紅色の回想」出版
- 大村義一郎氏 文藝誌「植人」千葉縣市川町五丁目高橋方より刊
- 赤羽松室氏 俳誌「潮聲」平町北目町八九より二月刊
- 高木風外氏 詩集「短唱園」編輯
- 片寄歌二氏 詩集「パンフレット」紫波立一氏 千葉鐵道隊に入營

寄贈深謝

地上樂園、詩展、詩美學、詩人劇場、睡、こまどり、瓜紅、潮(十一月)地上樂園、詩原始、未耕地、桔梗、金剛詩人、詩線、詩短冊、燈、光と影、マカロニ、こまどり、路(十二月)太陽樹、詩魔、未耕地、詩美學、地平線(仙台)公孫樹、短唱園、赤道、燈、青い街、野馬車、詩短冊、乾杯群、青葱、草原、詩欲、地平線、摺、行進、路、少國比新開(二月)詩美學、詩人劇場、潮聲、夜會服詩人、短唱園、赤道、草原、山彦、青葱芽生(青森)(二月)労働藝術家、聖樹詩人、文藝道、新世紀藝術公園風景、殺風景、瀬戸内海詩人、白路、燈々、通風筒、詩短冊、旅浪、青葱、植人、からたら、芽生、潮、二葉、キネマ文藝(三月)赤道、睡、子守唄、直線を行く街、青葱、芽生(四月七日迄)

同人

宮田 青波	福島縣平町銀治町廿六番地
佐藤 義家	同 七軒町卅二番地
小泉 貢	福島縣石城郡鹿島村
白江 市太郎	東京府下總ノ川下田端二二二堀川方
旦野 八千代	同 平町手堀町一二二番地
石井 賢三	大工町十九番地
片寄 歌二	五丁目二十八番地

正誤表

四頁清野榮二氏第一首一句二句御大典家を擧げて訂正、同じ四頁の宮田誠吉氏第一首三句居「る」字等と居てとし、同じく第三首目四句「葉」を葉の早さと訂正す

高久 晚霞氏序
小泉 貢 編纂

詩南社版

沈黙 (じしま)

四六判箱入 二百五十頁 定價一圓

(七月上旬發行)

沈黙は我が無名作家諸君の爲めに企圖された唯一の同人集である。我等の作品を一集めにして中央文壇に紹介するを目的として生れたものである。

何事によらず詩集、歌集その他單行本を出版するに當りて負擔ばかり掛かりて満足なものを出す事は到底不可能なのである。この意味に於て我等は負擔の節約も大部數發行を主眼として發行致すのである。

勿論我等は有名無名を問はない、唯々我々の微衷を汲んで同人となりそして沈黙の立派な生産を援助して下れる人が欲しいのである。同人加盟者の数が一人でも多ければ、それだけ内容の充實した本を作る事が出来るのである。それと同時に新しい機運に向ひつつある。我が文壇に一大センセーションを與ふれば吾々の本懐之に過ぎたるものなし。

規

沈黙に加盟すべき人は全て同人とし詩、歌、創作、原稿用紙二十枚以内、出版分増として金二圓及び略歴(一月目、二生地、三著書名の有無四關係五現住所、六近影)を添へて五月末日迄に申込まれたし。

福島縣平町五丁目

發行所 詩南社出版部

平搔槌小路

電話三番

1
雜
記

今迄で特南車に送られたものゝ大別するに二つにする事が出来る。一つは齒の浮く様な御世辭と、一は狂大的な漫罵である。前者は別として後者などは、無味意なき嘲笑、漫罵でこれなどは滑稽さを越して非哀を感じさせられる事しばしばある。

我等は前後二人に對し、愛をもつて批評される事を希望して止まない。

作品の配列は煩雜な邊で手書き次第に並べて見た。勿論其位置には何れの差別もない。陸月集などはその顯著な例で、描寫の同人が氣の向いたまゝ並べたに過ぎない。

それからこれは、何處の雜誌にもある事だが、殿り書きの原稿や、紙切に認めたが大分うった自己的作品に對して忠實でないからだ、そんな

平
新
田
町

電話二五〇番

平
新
田
岡

電話二二一六

寫眞は

福島縣平町仲田町

(赤心堂病院隣)

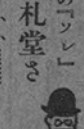
平町一丁目

色短各
紙冊種
壽
坂本紙店
電話 一八番

振替東京六六一七番

電話二一六番

いや……君
見違ひたよ
いゝアイギを
求めたね……
いやコレガネ
例の「ソレ」
正札堂と
アハハ……



正 札 堂
平町停車場通り

寫眞入りで一冊にまとめて贈呈したい積りである。
(片 寄)

詩、和歌、俳句、創作（散文、小品、戯曲）以上總べて原稿用紙使用の事、原稿の最初に種別及び住所姓名明記諱と雅號差支へなし、編輯は編輯部一任の事規定に反する時は取らず封筒には必ず原稿在中として二錢切手貼る事、

宛名 福之縣平町五丁目二十八番地
詩南社「詩南車」編輯部宛の事
締切 五月十五日 次號六月發行

題「雲山」に依る事、一人五首以内原種用紙もしくは半紙を用ゆる事、住所姓名明記の事、宛名 福島縣平町田町高久病院 高久曉霞氏宛の事 繕切 五月十五日

[illegible]

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K. K A M A Y A .

目科療診

外科、中見科、婦人科、
皮膚科、耳鼻咽喉科、
性病科、花柳病科、
性病科、

院長 醫學士 高 久 忠

副院長 新醫學士 志 羽 清

兼院長 刺士 佐 竹 義 雄

宅診 午前 午後

平町字田町六十四

高 久 病 院

電話 五一三番

特購紙片付之(領價廿錢)